

## 報告

# 山陽学園大学・山陽学園短期大学学生相談室の活動状況と 今後の課題

-10年の歩みとこれから-

Activities for ten years and future topics of discussion about

Student Counseling room of

Sanyo Gakuen University and College

石原 みちる\*

Michiru Ishihara

キーワード: 学生相談 活動報告 コミュニティ・アプローチ

Key Words: Student Counseling, Study of activities, Community Approach

### 1. はじめに

山陽学園大学・短期大学学生相談室(以下、相談室)は2003年に発足してから10年が経過した。その準備段階から関わったものとして、10年間の相談室の活動について報告し、今後の課題を検討したい。本学は大学2学部3学科、短期大学部2学科の学生数約1000名の小規模大学であるが、教職員が親身になって学生に関わる伝統が根付いており、学園としては120年の歴史ある大学である。相談室発足の契機となったのは、まさに学生に親身に関わっていた教職員が、その熱心さゆえに疲弊してしまったという事態であった。当時の学長、学生部長が心理援助の専門家による学生支援体制の必要性を強く感じ、学内の教員で臨床心理士であった筆者に具体化の相談が持ちかけられ、2003年4月より相談室の活動が始まり、今日に至っている。

本稿では、2003年度からの相談室の体制、来談者の状況、コミュニティ活動の概要を報告し、今後の課題を検討する。

### 2. 本学の学生相談体制の概要

まず、相談室の業務、人員、開室時間、相談の場所、これまでの活動経緯について述べる。

内規に定められている相談室の業務は、(1)学生の個人的問題(心の健康問題等)に関する

---

\* 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

相談・援助、(2)学生の問題に関する教職員のコンサルテーション、(3)学生の問題に関して必要な場合における保護者との連絡・面談、(4)相談業務を行なう上で必要な調査・研究、資料収集等、(5)その他相談室に関する必要な業務、である。相談室では、面接による個別の直接的援助だけでなく、在学生全体を視野に入れたコミュニティ活動も徐々に幅を広げてきた(表 1)。これは、開室の前年度に実施した教職員アンケートの結果を踏まえて、心理臨床の高い専門的知識による支援と同時に、学生が気軽に利用できる相談室、また守秘義務を守りつつ学内連携を進めるということを目指してきたことによるものである(石原・難波 2003)。

相談室は1週間に4日、午後に開室しており、学内の臨床心理士2名が兼任の学内カウンセラーとして2日、嘱託カウンセラー(非常勤・臨床心理士)が残りの2日を担当している。ただし、2004年度のみは、カウンセリング経験のある教員がもう1名大学に在職したため、週5日の開室であった。相談室を組織する人員は内規によって定められている(表 2)。学生相談室長は大学又は短大の学生部長が兼務で任命され、相談室の運営に関する事項を掌理するが、実際の相談には当たらない。また、学生相談室主任は臨床心理士(内規では「臨床心理士等の資格」)で、内規に示された主任の業務(ケース会議の開催、業務方針の決定など)と共に、相談業務も行っている。

開室時間は表 3 に示したとおり、12時30分から17時10分(水曜日のみ17時)で、学生の授業時間に配慮し、昼休み、授業の空き時間に利用しやすいように設定している。昼休みは“Free Open”と名付け、特に予約がなくても来室してよい時間としてアピールしている。

相談は予約を優先するが、空いていればその場でも相談できるようになっている。予約の申し込みは、メール、電話、直接来室、学生部窓口のいずれでも可能としている。

相談室の場所は、2003年度から2012年度までは図書館棟の一室であったが、2009年4月に男女共学になって以来、女性カウンセラーと男子学生の物理的距離が近すぎるという問題、保護者同伴など複数での相談時に部屋が狭い、保管資料の置き場がないというスペースの問題から2013年4月にA棟1階の広い部屋に移転した。但し、以前の相談室の方が「絨毯敷きで落ち着く」という継続利用の学生もあり、2013年11月現在は継続利用の学生が希望する場合に限り、旧相談室を「第2相談室」として使用している。

はじめに述べたように、本学の相談室の発足の契機は、学生に親身に関わっていた教職員が、その熱心さゆえに疲弊してしまうという事態であった(石原・難波)。表1は、その後の経緯について、筆者が学生相談室主任(2005年度を除く)として関わってきた立場から、相談室の記録を元に整理したものである。2002年の準備段階より、学内カウンセラーの難波愛氏と共に、相談室の基本的な枠組みを作り、教職員アンケートや来談学生からニーズを汲み取って活動を工夫し、運営を行ってきた。信頼に足る心理臨床の専門性を担保するため、相談室スタッフ(学内および嘱託カウンセラー、以下スタッフ)によるカンファレンスを毎月行い、全国レベルの専門性の高い研修に継続参加し、スタッフの研鑽に努めている。同時に、親しみやすい相談室であるために、新学期には学生ホールでの「出張オープン」、授業に出向く「出張授業」等のコミュニティ活動も行ってきた。コミュニティ活動については、後の項で詳しく報告する。学生及び教職員への広報手段としては、隔年でのリーフレット作成、新入生オリエンテーションでの紹介、2005年度からは「学生相談室からのお知らせ」の発行等を行っている。「学生相談室からのお知らせ」は、相談室スタッフからのメッセージ、開室予定日、相談方法を掲載し、学生掲示板に掲示すると同時に、全教職員にメールボックスで配布している。

言うまでもなく、これらの活動は、学生の支援においては教職員の親身な日常的関わり、種々の活動や運営においては学生部をはじめとする、学内組織の理解と協力があって実現してきたものである。また、特にピアサポート支援の立ち上げは西山久子氏、学生ホール出張オープン、身体障がい者支援の会の企画は上地玲子氏、アサーションセミナーは嘱託カウンセラーの虫明修氏、中野麻衣子氏、コミュニケーショングループは中野麻衣子氏の尽力による活動である。

表1. 相談室活動の経緯

2002年	学生部長からの提案で相談室発足準備 内規の制定 学生相談ニーズに関する教職員アンケートを実施 リーフレット作成:学生からイラストを募集(以後隔年で継続中)
2003年度	4月 相談室活動開始 新入生オリエンテーションで紹介(継続中) 相談室マニュアルの作成 記録・統計分類の整備 7月 防音工事完了 9月 教職員アンケートの分析し短期大学紀要に投稿 12月心理テスト VPI, YG の広報(以後、毎年実施) 3月 学生のデザインによる看板が完成
2004年度	週5日開室 学生相談学会機関会員となる(継続中) 4月 「年度初めの FREE OPEN」(自由来室)を4日間実施(2009年まで継続) 5月 学生相談学会大会参加(2008年まで継続) 10~12月 グループワーク「学生相談室セミナー」の開催(3回) 3月 学生相談学会 学生相談セミナー参加(継続中)
2005年度	週4日開室(以後週4日開室) 「学生相談室からのお知らせ」月1回の発行開始(継続中,2008年度10月より隔月)
2006年度	「学生相談室からのお知らせ」を教職員メールボックスに配布(継続中) 4~11月 学生ホールでグループワーク開催(4回)
2007年度	4月 社会人学生の会開催(継続中) 連携授業「自己分析」(現在「学生相談室出張授業」として継続中)
2008年度	SSS(ピアサポートの会)の活動支援開始
2009年度	〈大学・短大男女共学化 看護学部新設〉 9~11月 学生相談室連続セミナー:アサーションセミナーを開催(5回)
2010年度	4月 学生ホール出張オープン, ストレスチェック(継続中) 身体障がい学生支援の会「さくら咲く会」を開始(月1回継続中)
2011年度	4月 PRカードの作成(2012年まで継続) コミュニケーションスキルアップグループを開始(月1回継続中)
2012年度	1月「学さぼ」(学生による新入生サポート)の準備を学生部と協働で進める
2013年度	4月 「学さぼ」の支援 4月 相談室をA棟に移転 愛称を「ここさぼ」とする

表2. 相談室の構成員

学生相談室長（学生部長が兼務）	1名
学生相談室主任	1名
学内カウンセラー(専任教員が兼任・臨床心理士)	2名(うち1名は学生相談室主任) (内規では若干名)
嘱託カウンセラー(非常勤・臨床心理士)	1名(内規では若干名)

表3. 相談室の開室状況(2012年度)

	月	火	水	金
授業時間	嘱託カウンセラー	学内カウンセラーA	嘱託カウンセラー	学内カウンセラーB
昼休み 12:15～ 13:05	12:30～13:10 FREE OPEN	12:30～13:10 FREE OPEN	12:30～13:10 FREE OPEN	12:30～13:10 FREE OPEN
3限 13:05～ 14:35	※	※	※	※
4限 14:50～ 16:20	13:50   17:10	13:50   17:10	13:50   17:00	13:50   17:10
5限 16:30～ 18:00				

※相談室の昼休憩時間

### 3. 利用状況の推移(個別援助)

#### 1) 個別援助の利用件数とその内訳

各年度の相談室の利用件数(のべ件数)と、その内訳を表4, 図1に示した。但し、各年度に教授会で報告してきた統計件数は3月末までの利用が含まれていなかったため、本報告では対応記録等を再確認し、以下の統計を行った。

2004年度の件数が478件と多いのは、表1にも示したとおり、この年度のみ学内カウンセラーが3人(大学に2人、短大に1人)おり、週5日開室であったためである。2006年度の減少は、学内カウンセラーが交代(大学2人、短大0人)した影響と考えられる。

利用の内訳を見ると、個別の面接相談が最も多く、全体の件数もその数によって推移している。電話、メールによる相談は一定の範囲である。コンサルテーション、会議、その他(外部機関連携等)は、2009年度以降30件から50件の間で推移している。学内教職員との一定の連携が図られている状況と言える。

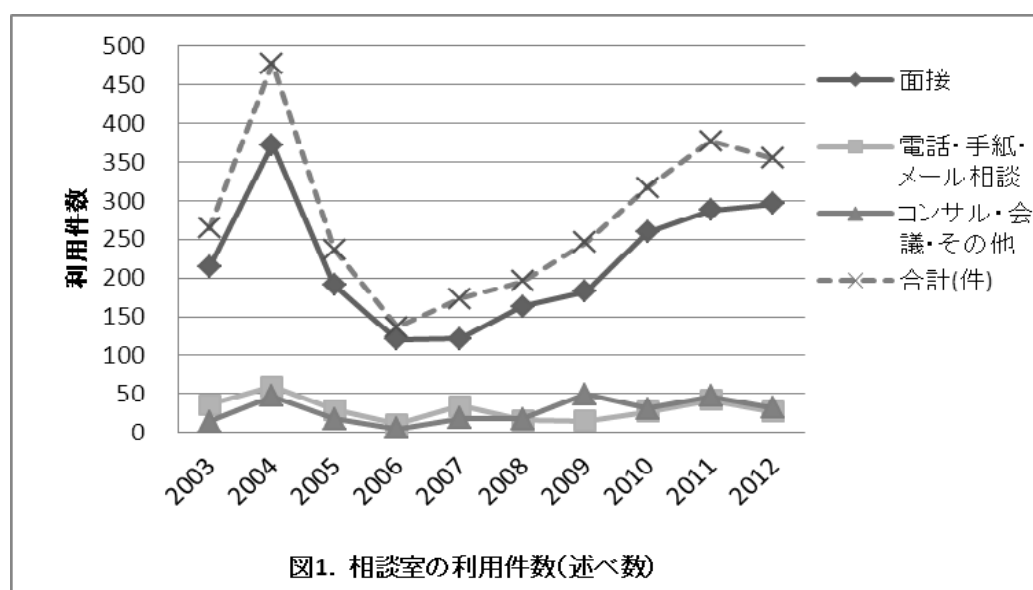
次に、各年度の月別の利用件数を表5, 図2示した。8月は夏季休業となるため、開室が3, 4日となっており、利用件数は少ない。9月, 2月, 3月の利用件数も、授業休業期間のため少なくなっている。授業期間では前期の方が多く、入学時期や学年の前半の適応に支援が必要であることがわかる。また、6月, 7月の件数が多く、新生活への適応がうまくいかず、がんばりが続かない状態に陥る学生、前期試験という課題の前で立ちすくむ学生の姿が見える。

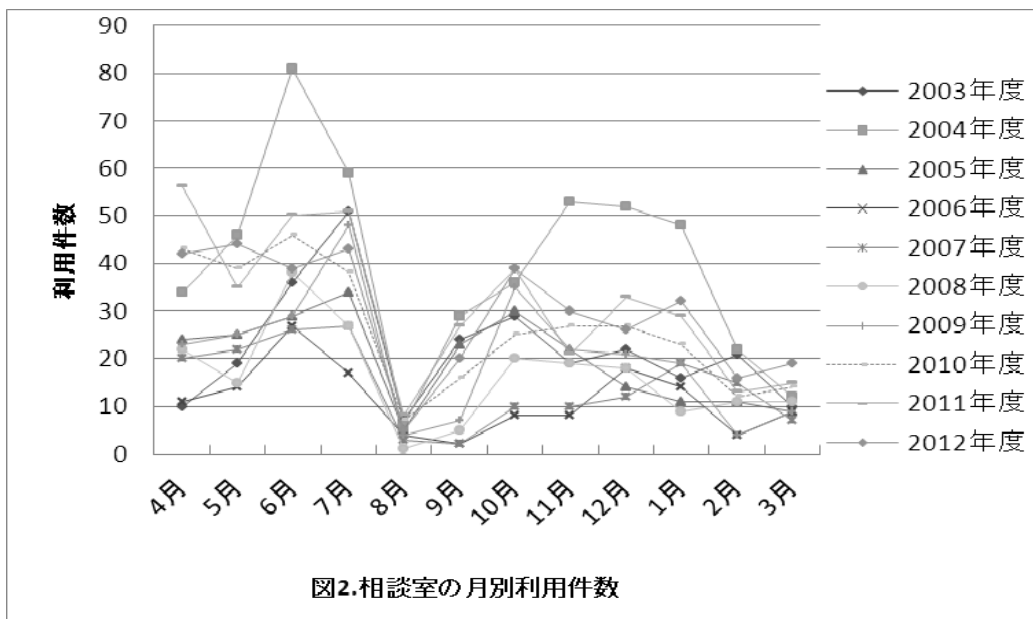
表4. 相談室の利用件数(述べ数)

年度	面接	電話・手紙・メール相談	コンサル・会議・その他	合計(件)
2003	214	36	14	264
2004	372	59	47	478
2005	191	29	17	237
2006	120	11	5	136
2007	121	34	18	173
2008	163	16	17	196
2009	182	15	49	246
2010	259	27	31	317
2011	288	42	47	377
2012	296	27	32	355

表5. 相談室の月別利用件数

年度 月	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	合計 (件)
4月	10	34	24	11	20	22	23	43	56	42	285
5月	19	46	25	14	22	15	25	39	35	44	284
6月	36	81	29	27	26	38	29	46	50	39	401
7月	51	59	34	17	27	27	48	38	51	43	395
8月	7	6	5	4	3	1	4	7	8	5	50
9月	24	29	23	2	2	5	7	16	27	20	155
10月	29	36	30	8	10	20	35	25	39	39	271
11月	19	53	22	8	10	19	22	27	21	30	231
12月	22	52	14	18	12	18	21	27	33	26	243
1月	16	48	11	14	19	9	19	23	29	32	220
2月	21	22	11	4	15	11	4	12	13	16	129
3月	10	12	9	9	7	11	9	14	15	19	115





## 2) 個別援助の実人数

相談室への来談学生の実人数を表6、図3に示した。件数と同様、週5日開室であった2004年度が多く、その後増減はあるが、増加が見られる。2005年度減少は開室日が4日に減ったことの影響、2009年度の減少は学内カウンセラーの交代の影響と考えられる。

学生数に対する来談率を見ると、初年度と2005年度を除くと4.7%から5.8%の間で推移しており、2005年度以降は大学の来談率が短大よりも大きいことがわかる。大学に比べて短期大学は授業の空き時間が少なく、相談室を利用しにくいことと、学内カウンセラーの移動により短大教員との兼任学内カウンセラーがいなくなった影響と考えられる。また、全国の調査では、2009年度の大学全体の来談率は2.8%であり(吉武他 2010)、本学の来談率がそれと比べて高く、学生によく利用されていることがわかる。ただし、短期大学の全国の平均は6.0%となっており、短期大学に関しては本学の来談率は低いと言える。

来談実人数のうち、新規の来談者と前年度以前からの継続の来談者の推移を表7、図4に示した。全般に新規の来談実人数が継続の来談実人数を上回っている。一定数は年度内の支援で解決するが、年度を越えて支援が必要な学生が毎年15名前後あり、増加傾向である。また、大学の来談者の割合が増えることで、在籍年数の関係から継続来談が多くなる傾向があると考えられる。

相談内容は、表8のように分類して集計を行っている。実際の相談は、複数の内容が含まれていたり、途中で相談の内容が変わったりすることが少なくないが、統計上は初期の主訴で一つだけに分類している。

年度毎の相談内容の内訳を表9、図5に示した。心理テストはやや減少の傾向にある一方、心理・適応が増加傾向である。内容的には、対人関係での困難が来談のきっかけになることが多い。相談員の印象としては、入学前から医療機関、スクールカウンセラーなどの専門的な支援を受けていた例が多くなっている。「心のことで相談」することへの抵抗が弱くなり、相談室にも始めから心理的問題として来談する例が増えているのではないだろうか。逆に、インターネットなどで

手軽に心理テストが受けられるようになり、心理テストのちらしで興味を引かれる度合いが減少している印象がある。休・退学、転学部の問題は、一定の割合で存在するようである。

表 6. 相談室の利用実人数と来談率

年度	大学		短大		その他※ (人)	合計	
	(人)	来談率(%)	(人)	来談率(%)		(人)	来談率(%)
2003	7	2.01	15	2.07	0	22	2.05
2004	19	4.95	32	4.71	0	51	4.79
2005	16	4.17	13	2.06	0	29	2.85
2006	21	6.09	21	3.61	0	42	4.54
2007	32	9.82	16	3.06	0	48	5.65
2008	26	9.03	14	2.99	0	40	5.29
2009	24	7.29	10	2.87	1	35	5.16
2010	34	7.16	12	3.66	1	47	5.85
2011	35	6.21	12	3.29	0	47	5.06
2012	45	6.84	13	3.39	0	58	5.57

※その他は、同じ学園の高校からの相談、聴講生等

表 7. 新規来談者数と継続来談者数(実人数)

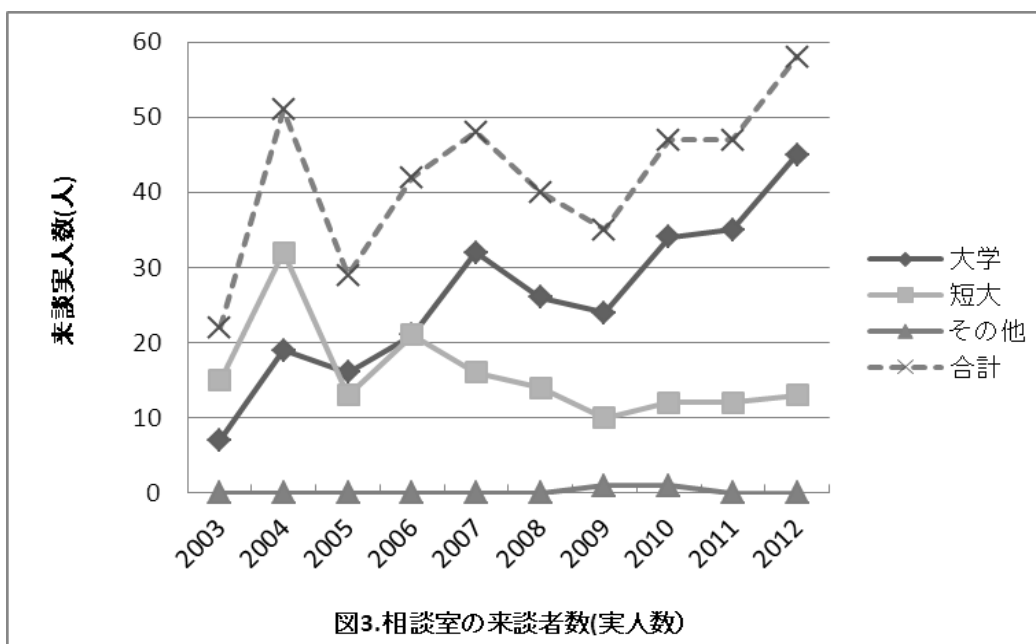
年度	新規	継続	合計(人)
2003	22	-	22
2004	40	11	51
2005	21	8	29
2006	38	4	42
2007	39	9	48
2008	23	17	40
2009	24	11	35
2010	32	15	47
2011	31	16	47
2012	33	25	58

表 8. 相談内容分類

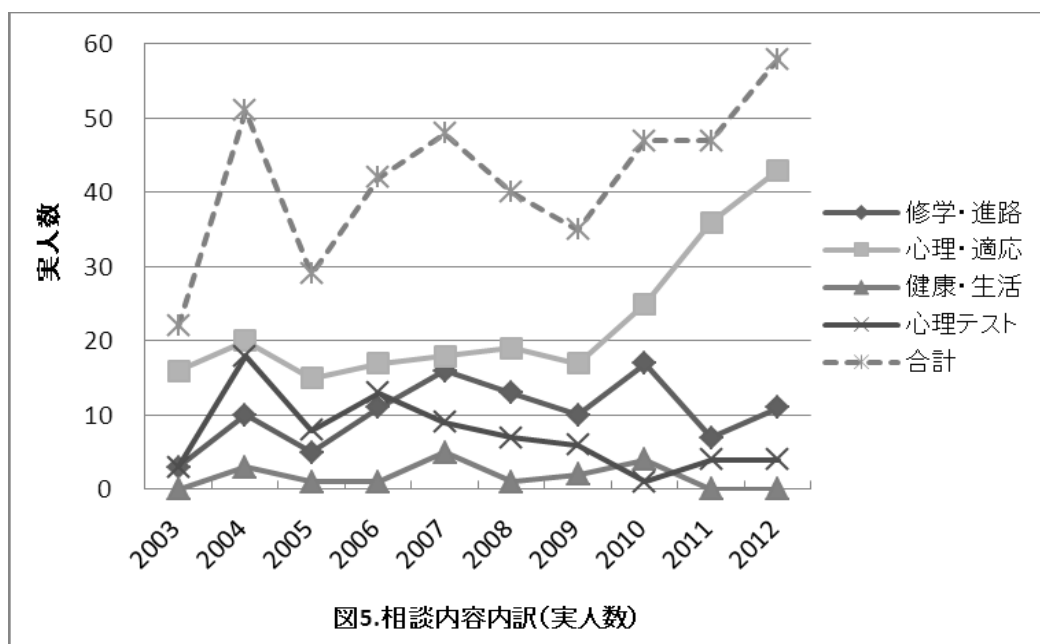
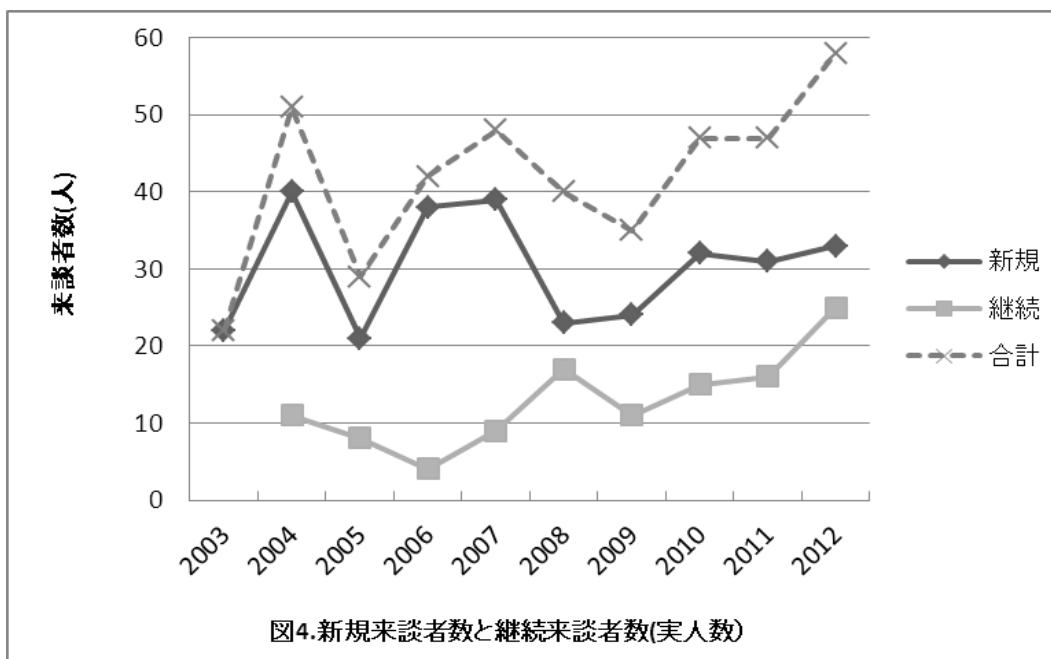
修学・進路	心理・適応	健康・生活	心理テスト
学業 転編入学 休退学 就職・進路 課外活動	対人関係 異性・性 心理性格 家庭 人 生観 精神衛生	身体 健康 経済 住居 その他	性格テスト 職業興味検査等

表 9. 相談内容内訳(実人数)

年度	修学・進路	心理適応	健康・生活	心理テスト	合計(人)
2003	3	16	0	3	22
2004	10	20	3	18	51
2005	5	15	1	8	29
2006	11	17	1	13	42
2007	16	18	5	9	48
2008	13	19	1	7	40
2009	10	17	2	6	35
2010	17	25	4	1	47
2011	7	36	0	4	47
2012	11	43	0	4	58







#### 4. コミュニティ活動

個別援助以外の大学全体に向けた活動をコミュニティ活動とし、主なものを表10-1、表10-2に示した。

##### 1) 心理テストの広報

学生全体に相談室利用を呼びかけ、特に困っている状態でなくても相談室が利用できることを知らせるため、2003年度より心理テスト(YG 性格検査, VPI 職業興味検査)の広報ちらしを作成し、授業等で配布している。心理テストでの相談室利用をきっかけに継続援助につながる例も

ある。近年の傾向としては、上述のように心理テストが手軽に利用できる方法が広がっているためか、チラシに反応しての利用者数は減少の傾向である。

そうした状況の変化を受けて、新たな心理テストサービスとして 2010 年度より、年度初めに学生ホールにおいてストレスチェックと相談ができるコーナーを設けている。

## 2) 学生相談室セミナー

2004 年度から 2006 年度、全学生を対象とする活動として、また相談室や相談室スタッフを知ってもらう活動として、学生相談室セミナー(グループワーク)を行った。表 10-1 に詳細を示したが、内容は、ストレスマネジメント(動作法)、カラーージュ制作、茶菓を準備しての構成的グループエンカウンター(SGE)等である。2004 年からの 2 年間は教室で行い、2006 年はより多くの学生の目に触れるよう、学生ホールで行った。参加学生の感想は、「楽しかった」、「役に立てたい」など好意的なものが寄せられている。また、教職員への学生相談活動の周知としての意味もあり、教職員の参加もあった。

一方で、他の行事と日程が重なる、呼びかける範囲が広すぎて相談員と面識のある学生の参加が中心となるなどの問題があった。実施する内容もターゲットが広すぎて漠然としてしまうということがあり、現在は、多くの学生に授業時間内で心理教育を行うという「出張授業」と、ニーズを特定した少人数でのグループ活動の 2 つの形に変え、それぞれ継続中である。

## 3) 出張授業

「出張授業」は、2007 年度に授業(社会人入門)担当の非常勤講師より、学生の自己理解を促進できる方法はないかとの相談があり、実施に至った。担当教員が自己分析テストを実施した後、カウンセラーからそのとらえ方、性格の考え方、進路選択について話したものであった。その後、相談室から提供できる「出張授業」の内容を一覧にし、教員に配布しところ、次の年度には 5 件の依頼があった。これらは、コミュニティからのニーズの吸い上げと、相談室からの提案の両面のアプローチによって成立しているものである。1 授業当たり 1 回という原則で行っている。

「出張授業」は、個別の相談では利用することのない学生への心理教育としてだけでなく、相談室や相談室のスタッフを学生が知る機会として役立っている。出張授業をきっかけに個別の相談につながる学生も少なくない。授業の感想をアンケートで尋ねているが、概ね好評である。アンケートから課題を抽出し、次年度に改善することも行っている。総合人間学部の「出張授業」で日本語のストレスチェックリストを用いていたところ、留学生の理解が進まないことが問題となり、2012 年には留学生の協力を得て中国語訳付のチェックリストを作成した。そのことにより、留学生の出張授業の内容理解に大変役立っている。

吉武(2010)は、カウンセラーが行う授業の意義について、学生相談のセンサー機能により、不適應の予防に貢献することができる等を指摘している。本学においても意義ある活動と考えられる。

## 4) ニーズを特定したグループ活動

上述のように、学生全体に呼びかけるセミナーの問題点の検討から、共通したニーズを持つ学生にそのニーズに合った内容を提供するグループ活動を考案するに至った。そして、「社会人学生応援の会」(2007 年度から)、「身体障がい学生応援の会」(2010 年度から)、「コミュニケ

ーションスキルアップグループ」(2011年度から)の3つのグループ活動を現在継続している。

「社会人学生応援の会」は、社会人の新生が、周囲の学生との違和感を訴える相談が相次いだため、社会人入学の新生と上級生に呼びかけ、交流の場を設けたのが始まりである。社会人学生は目的意識が明確で、対人関係を形成する力にも優れている場合が多く、1回の開催で学生同士が連絡先を交換するなど、相互援助の関係を築くことのできる場合が多い。相談室スタッフと顔見知りになる場としても機能し、学生生活に馴染むまでの間、相談室を利用する学生もある。

「身体障がい学生支援の会」は、身体障がいを抱える学生の、少人数で話のできる場がほしいという希望から発足した。月1回、お昼休みに集まり、学内カウンセラー2名が同席して、おしゃべりや情報交換、ニーズの把握を行っている。発足当時はピアヘルパーとして活動していた上級生が数人参加して進めていたが、身体障がい学生自身が代表としてメンバーへの連絡やちらし作りを行うなど、役割を持つようになっていく。3年後の障害者差別解消法施行を見通せば、今後は汲み上げたニーズを組織的に対応する体制の整備が望まれるところである。

「コミュニケーションスキルアップグループ」は、コミュニケーションが苦手、人間関係が苦手な学生が、相談員との1対1の面接だけでなく、学生同士の関わりを体験する場として機能している。嘱託カウンセラー1名が同席し、原則月1回、固定のメンバーで行っている。授業や居場所に関する情報交換、困ったときの対処法など、各回テーマに沿って実施している。カウンセラーの支援を得て学生同士が関わるができるため、出席しにくかった授業に出席できるようになるなど、参加者数は少数ながら意味のある場となっている。

##### 5)ピアヘルパーの支援

2007年度より、コミュニケーション学部(当時)のピアヘルパー資格(日本教育カウンセラー協会)取得者及び取得希望者の活動を、相談室としても支援している。コミュニケーション学部(現総合人間学部)では、学生相互の支援の会(SSS;Sanyo Support Station)として種々のピアヘルプ(ピアサポート)活動に取り組んでいるが、その活動のうち、新生のための相談コーナーの運営を相談室スタッフが支援してきた。さらに、2013年度には、より全学的な活動にしようという学生部との協働で、「学さぼ」という全学部の学生に協力を得た、新生相談ブース開設に至っている。

##### 6)教職員への活動報告

2003年度から2008年度は年2回、2009年度以降は年度末に1回、大学、短期大学の各教授会において、全教員に相談室の年間の活動報告を行い、次年度の活動予定を周知している。活動報告では、当該年度の利用件数、来談実数、コミュニティ活動の活動内容等を報告している。

表 10-1. 相談室のコミュニティ活動(セミナー, 出張授業, ピアヘルパー支援等)2004~2009年度

活動	概要
2004年度 学生相談室セミナー(3回)	10月『ストレスとうまくつきあおう』(405教室,10名)ストレスマネジメント 11月『ココロの中のイメージを表現してみよう』(405教室,16名)コラージュ制作体験 12月『No!と試してみよう』(405教室,2名)ソーシャルスキルトレーニング
2005年度 学生相談室セミナー(2回)	10月『カラダに耳を傾けよう, 感じよう』(405教室,5名)ストレスマネジメント(動作法) 11月『話を聴こう, 聴いてもらおう』(405教室,4名)ピアサポート体験
2006年度 グループワーク4回	4月『昼休み茶話会』(学生ホール,13名)茶菓と自己紹介ゲーム 5月『昼休み茶話会』(学生ホール,9名)茶菓とSGE(共同絵画) 6月『昼休み茶話会』(学生ホール,7名)茶菓とSGE(自己理解促進) 11月『クッキーを作ろう』(学生ホール,25名)ホットプレートで簡単クッキー作り
2007年度 社会人学生応援の会 協働授業「自己分析」 出前・協働授業の広報 ピアサポートの会の活動支援	4月 社会人入学の学生の交流会(609教室,4名) 11月『自己分析』性格の考え方:食物栄養学科・社会人入門(1年 87名) 12月 提供できる授業内容を一覧にして教員に広報(継続中) SSS(ピアサポートの会)に学生をつなぎ,その後フォロー
2008年度 ピアサポートの会の活動支援 出張授業(5件)	4月 昼休みのSSSの相談活動を支援(学生ホール) 4月『いろいろな人と仲良くなろう! -相談室紹介』関係作り,多様性受容:コミュニケーション学科・コミュニケーション概論(1年 67名) 10月『ストレスと上手につきあえる社会人になろう!』ストレスマネジメント:食物栄養学科・社会人入門(1年 59名) 11月『その性格,直した方がいい?』性格の捉え方のリフレーミング:食物栄養学科・社会人入門(1年 59名) 11月『身体の余分な力を抜いてリラックス』動作法体験:コミュニケーション学科・臨床心理学演習(3年 15名) 11月『医療現場での臨床心理士の仕事』:コミュニケーション学科・臨床心理学(2年 24名)
2009年度 SSS 社会人学生応援の会 学生相談室連続セミナー 出張授業(5件)	4月 昼休み SSSの活動を支援(学生ホール) 6月 SSS上学年生の協力もと,関係作りを行った(604教室6名) 9~11月『アサーションを体験してみよう』全5回(405教室,のべ15名) 5月『いろいろな人と仲良くなろう! -相談室紹介』関係作り:幼児教育学科・一般教養基礎(1年 71名) 11月『さわやかな自己表現をして,人間関係のストレスを解消しよう!』アサーション:食物栄養学科・社会人入門(1年 76名) 11月『身体の余分な力を抜いてリラックス』動作法体験:コミュニケーション学科・臨床心理学演習(3年 13名) 12月『考えてみようこころの運転(実習の前に)』実習前の不安に対するグループワーク:幼児教育学科・一般教養基礎(1年 70名) 1月『医療現場での臨床心理士の仕事』:生活心理学科・臨床心理学(1年 32名)

表 10-2. 相談室のコミュニティ活動(セミナー, 出張授業, ピアヘルパー支援等)2010~2012年度

活動	概要
<p>2010年度 社会人学生応援の会 身体障がい学生支援の会 出張授業(3件)</p>	<p>4月(604教室,13名)希望があり7月にも実施 「さくら咲く会」昼休みに昼食を食べながら情報交換等を行う(月1回) 4月『隣の人はどんな人? -相談室紹介』人間関係作り:言語文化学科・コミュニケーション概論(1年70名) 6月『自分の気持ちをうまく伝えるには?』アサーション:幼児教育学科・社会人入門(2年70名) 1月『医療現場での臨床心理士の仕事』生活心理学科・臨床心理学(1年32名)</p>
<p>2011年度 社会人学生応援の会 コミュニケーションスキルアップグループ 身体障がい学生支援の会 出張授業(5件)</p>	<p>4月(604教室,11名) 固定メンバーによるグループワーク(原則月1回60分,2名):授業や学内で過ごせる場所など学生間の情報交換の場。 「さくら咲く会」昼休みに昼食を食べながら情報交換等を行う(月1回) 5月『人間関係:身近な人をもう少し知ってみよう』:幼児教育学科・社会人入門(1年120名) 6月『考えてみよう"心の運転"』ストレスコーピング:幼児教育学科・社会人入門(2年100名) 7月『自己理解・他者理解を深めよう』:総合人間学部・知的生き方概論(1年90名) 12月『ストレスとうまくつきあおう(実習の前に)』:幼児教育学科・社会人入門(1年120名) 1月『医療現場での臨床心理士の仕事』:生活心理学科・臨床心理学(1年32名)</p>
<p>2012年度 社会人学生応援の会 コミュニケーションスキルアップグループ 身体障がい学生支援の会 出張授業(6件)</p>	<p>4月(604教室,7名) 固定メンバーによるグループワーク(原則月1回60分,2~3名):ストレス対処や話し方をワークシートを使って練習。 「さくら咲く会」昼休みに昼食を食べながら情報交換等を行う(月1回) 5月『人間関係:身近な人と知りあいになってみよう』多様性受容と聞き方のワーク:幼児教育学科・社会人入門(1年110名) 6月『ストレスマネジメント, コーピングスキル』:看護学科・養護概説(3年16名) 6月『人の話を聞く』聞き方のワーク:看護学科・養護概説(3年16名) 7月『ストレスとうまく付き合おう』:総合人間学部・知的生き方概論(1年79名) 12月『考えてみよう"心の運転"』ストレスコーピング:幼児教育学科・社会人入門(1年110名) 1月『医療現場での臨床心理士の仕事』:生活心理学科・臨床心理学(1年23名)</p>
<p>「がくさぼ」の準備</p>	<p>1月~3月 学生による新入生サポートの準備を学生部と協働で進める</p>
<p>2013年度(11月まで) 社会人学生応援の会 「がくさぼ」の支援 コミュニケーションスキルアップグループ 出張授業(4件)</p>	<p>4月(604教室,2名) 4月 学生による新入生サポートブースを支援(学生ホール) 固定メンバーによるグループワーク(原則月1回60分,2名):SSTボードゲーム, VPIの実施。情報交換の場。 4月『コミュニケーションって難しい?』アサーション:幼児教育学科・社会人入門(2年110名) 5月『身近な人と知り合いになってみよう』:幼児教育学科・一般教養基礎(1年110名) 6月『ストレスマネジメント, コーピングスキル』看護学部・養護概説(3年12名) 7月『ストレスとうまく付き合おう』:総合人間学部・知的生き方概論(1年70名)</p>

## 5. 今後の課題

相談室からみた、また、相談室の今後の課題を何点か指摘しておきたい。

まず、相談室を利用する学生、また授業等に関わる学生の声として、「居場所」を求める声が少なくない。多くの学生が利用する学生ホールなどは人の目が気になって居られないという学生が少数ながらあり、昼食を取ったり、空き時間などに人目を気にせず静かに過ごせたりする場を求めているようである。大谷(2007)は、学生 600 名の調査から、10%の学生が休み時間を「何をしたいかわからない」「苦痛」としており、「静かに過ごせる」「睡眠がとれる」場所を求めているとしており、学生の声が、本学に限ったものでないことがわかる。「学生相談機関ガイドライン」(日本学生相談学会 2013)では、「談話室、フリースペース」として、「学生が自由に過ごしたり、学生同士が話したり」できる居場所を設けることが望ましいと述べられており、本学でも今後整備されることが望まれる。その際、場所だけでなくスタッフの目が届くということも必要である。

また、身体面の相談窓口の必要性について、2003 年 9 月の大学・短大自己評価報告書、同 11 月の学内連絡会議の議事録にすでに記述があり、相談室の開設当初から必要と認識されている。身体面の訴えと心理面の適応は不可分であり、整備が望まれる。2013 年 9 月、本学全体の安全・安心に関する機構が発足したところであるので、今後心理面と身体面の両面からの支援ができる体制が整うことを期待したい。

最後に、相談室の活動の報告のあり方について述べる。2009 年度に看護学部が新設され、新しい教員も増える中、相談室が教職員全体の理解を得る必要はますます増えていると思われる。相談室の活動はある程度軌道に乗っているところではあるが、さらに教職員の理解を得る工夫が必要であろう。

以上、本学の相談室の活動報告と今後の課題を述べた。今後も学生に対して親身に関わるという本学の良き伝統をよい形で実現し、相談室と教職員が協力して、一人ひとりの学生の人格的成長を支援できるよう、さらにはそれが大学全体の教育力の向上に役立つよう工夫を重ねていきたい。

## 参考文献

石原みちる・難波愛(2003). 大学コミュニティにおける学生相談のニーズについて 山陽学園短期大学紀要, **34**, 1-13.

日本学生相談学会(2013). 学生相談機関ガイドライン 日本学生相談学会

大谷真弓(2007). 本学の学生相談活動の傾向と学生の居場所について 大阪工業大学紀要 人文社会篇, **52**(1), 25-44.

吉武清實(2010). 学生に向けた活動 1-授業への取り組み- 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) 学生相談ハンドブック 学苑社 pp.168-184

吉武清實・大島啓利・池田忠義 他 (2010). 2009 年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究, **30**, 226-271